

地 域 連 携 だ よ り

彦根市立病院

〒522-8539 滋賀県彦根市八坂町1882番地

TEL : 0749-22-6050(代)

問い合わせ先 彦根市立病院 地域医療連携室

TEL : 0749-22-6053 FAX : 0749-22-6093


 いつもありがとうございます


患者さんとともにある薬剤師を目指して

薬剤師の最も重要な業務の一つは、医師が処方されるお薬を忠実に調剤し、患者さんにお渡することですが、近年調剤業務以外にさまざまな取り組みを行っています。その一つに病棟薬剤業務があります。これは、薬剤師も入院患者さんの状態を把握し、医師や看護師、メディカルスタッフと情報を共有し、それぞれの専門性を活かし協働することで、安全かつ有効で最適な薬物治療が行われるようサポートするものです。

また、今年度から入院患者さんに対する服薬指導(薬剤管理指導)を大幅に増やしています。この業務は以前から取り組んでいますが、病棟薬剤業務に人員が割かれ、なかなか業務展開することができませんでした。しかし、ようやく人員を確保することができ、件数を増やすことが可能になりました。服薬指導は、患者さんの状態を把握し、

処方の最適化を図ることは病棟薬剤業務と同じですが、同時にベッドサイドに赴き、患者さんに副作用が発現していないか、服薬において飲み込みにくい等の問題はないかなどを確認しています。この情報により、お薬の量は適切か、錠剤より粉薬の方が服用しやすいのではないかなどを評価し、他のスタッフにフィードバックし、より患者さんに合った薬物療法をチームで検討しています。

また、患者さんへのお薬の説明を通じて、患者さん自身が服薬することの重要性を理解していただくことで、薬物療法の効果をより有効に発揮することができます。

当薬剤部は、病棟薬剤業務と服薬指導をチーム医療の両輪として捉え推進していくことで、ホスピタリティーと科学が融合したより良い医療を提供していきたいと考えています。

医療の現場で薬物療法を支援

10
2019

◆ 各病棟に専任薬剤師を配置

病棟専任薬剤師は、入院患者さんに対する最適な薬物療法の実施や、患者さんのQOLの向上、また病棟における薬剤に関するインシデント・アクシデントの減少などを目標とし、業務に取り組んでいます。

病棟専任薬剤師が病棟で行う業務は、原則として薬剤投与前の「病棟薬剤業務」と、投与後の「薬剤管理指導業務」に分けられます。病棟によってその専門性と業務内容が異なるので、病棟専任薬剤師は病棟の機能に適した質の高い病棟業務を実施しています。

患者背景および持参薬の確認とその評価に基づく処方設計と提案

- ・入院患者さんと面談し、入院治療において注意が必要な薬剤を確認

患者状況の把握と処方提案

- ・副作用や効果確認のために、バイタルサインチェック、フィジカルアセスメントを実施し、副作用の軽減と防止に貢献
- ・投薬されている薬剤のアドヒアランスおよび服薬の阻害因子を評価・確認

医薬品の情報収集と医師への情報提供

薬剤管理指導業務

- ・入院患者さんの薬歴管理と服薬指導を行い、患者さんの薬物療法への認識を向上させ、また患者さんから得られた情報を医師にフィードバックし薬物療法を支援

持参薬確認



患者説明



◆ 適切な抗菌薬の使用を支援

AST (Antimicrobial Stewardship Team)活動

当院では2018年よりAST (Antimicrobial Stewardship Team)を立ち上げ、医師4名、抗菌化学療法認定薬剤師を含む薬剤師3名、細菌検査技師4名、感染管理認定看護師2名で活動し、抗菌剤の適正使用について支援しています。不適切な抗菌薬の選択や投与量が誤っていると、副作用だけでなく耐性菌の出現リスクにもつながってしまいます。ASTは抗菌薬の使用を減らすことが目的ではなく、適正に使用して患者さんのアウトカムをよくするための支援をするチームとして活動をしています。

対象患者

- ・抗菌薬長期投与患者(10日以上投与中の患者)
- ・対象抗菌薬(TAZ/PIPC、キノロン系、カルバペネム系、抗MRSA薬)
- ・血液培養陽性患者

ASTラウンド

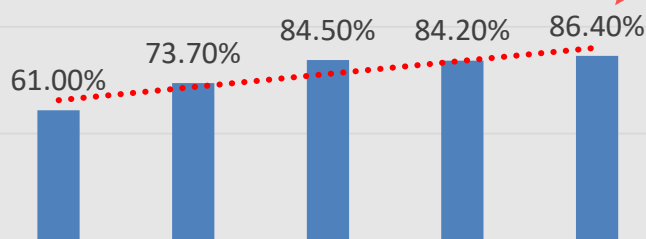
- ・週に1回ラウンド実施(毎週10症例程度)
- ・ASTメンバーが各病棟で診療録など確認しディスカッション
- ・主治医へ情報提供し抗菌薬治療を支援

直近3か月の延べ対象患者数

対象抗菌薬長期使用例	12例
血液培養陽性例	19例
主治医からの相談例	56例

血液培養複数セット採取率

増加



起因菌を特定し最適な抗菌薬治療を行うために、当院では血液培養を複数セット採取することを推奨しています。

病棟専任薬剤師の奮闘記！

ポリファーマシーとは「Poly(多くの)」+「Pharmacy(調剤)」の造語ですが、単に薬剤数が多いことではなく、薬剤が多いことにより薬物有害事象につながる状態や飲み間違い、残薬の発生につながる問題のことをいいます。さらに、不要な処方や過量重複投与など、あらゆる不適正処方も含みます。

先日COPD増悪で入院されたKさん(75歳男性)のお話です。内服薬がなんと25種類、外用薬は10種類以上の持参薬を見て、これはなんとかなくては、とお話を聞きに伺いました。

 **薬剤師** 「こんにちは。こんなにたくさんの薬を管理するのは大変そうですね。間違いなく飲めていますか？余っている薬はありますかしら...。」

 **Kさん** 「きちんと飲んでる。自分でわかって飲んでるから飲み忘れることなんかない。大事な薬やから。吸入もきちんとしてる。湿布も数かぞえて使ってるから減らされたら困るんや。」

 何が何の薬かまで細かく説明され、なるほど、確かにきちんと理解され服用されていそうな印象。そこで...
「漢方薬2種類も飲むのは大変じゃないですか。効果は出ていますか？」

 「こっちの漢方は痰の切れが良くなるから飲んでる。飲んでないと痰がからむんや。もう一つのは手のしびれが痛くて飲んでる。飲んでたら痛みはましになる。」

 「塗り薬はどうですか。こんなに何種類もたくさんありますが全部使っているのですか？」

 「これは背中の褥瘡みたいになってるところに塗る。こっちは痛いところに、湿布でかぶれるから塗り薬にするんや。」

話を聞くほど薬に対する執着を感じ、簡単には薬を減らせなくなっていくます。しかし、そこで引き下がるわけにはいきません。視点を変えて...

 「今はしっかりしているから自分でお薬を飲めるけど、将来、誰かにこの薬を管理してもらわないといけなくなるかもしれない、その時にこんなにたくさん飲んでいたら大変だから誰も管理してもらえないかもしれないですよ。」

 「.....」

 「どこかの施設に入るにしても薬が多い人は施設に断られることもあるんですよ。将来のことを考えるとお薬はもう少し減らした方がいいのではないですか。」

 「.....そうか、確かにいつまでも自分で管理できるわけじゃないかもしれんな。減らせる薬なんてあるんか。何の薬なら減らせるんや？」

 「まずは外用薬から減らしましょう。そのうち内服薬も1個ずつ順番に減らしていきましょう。」

 「はい、お願いします。」

このKさんのケースでは、薬剤師の話に耳を傾け少しずつわかってもらえ、院外薬局の薬剤師さんの協力も得て外来通院中も継続してお薬の種類を減らすことに成功しました。しかし、患者さんのこだわりは患者さんごとに様々でうまくいかないことも多いです。それでも、不必要な薬がないか、薬の量を少しでも減らせないか、患者さんに薬を正しく飲んでもらうだけでなく薬物治療の最適化に少しでも貢献できたらと、日々、薬剤師として情熱をもって取り組んでいます。

🌸 地域連携紹介患者専用窓口を設置しました 🌸

9月から地域連携紹介患者さんは、
診察・検査・会計の順番を優先して受付させていただいております。



初めて来たけど不安なく
スムーズに回れました

紹介されて不安に思っ
てる中で、待たずに診て
もらえてありがたかった。



患者さんからも好評な意見を伺っています。

ぜひ地域連携でご予約いただき、ご紹介をよろしくお願いします。